

出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通

小畑弘己

一、錢貨研究の問題点と本論の目的

出土錢貨は一旦人の手を離れ、土中に埋没する過程において、次の二つのカテゴリーに分けられる。それは換言すれば人為的意志の有無によって付加された錢の二義的・後天的性格である。

- ①埋納錢（経塚埋納錢、祭祀（地鎮）遺構出土錢、六道錢、備蓄錢、奉賽錢など）
- ②廃棄・遺棄錢（包含層や土壙などの上記以外の遺構から出土するもの）

①の埋納錢は、各種思想的背景に裏付けられた慣習に基づく意図的な行為によって容器もしくは土中に封印されるもので、その錢種選定にあたって選択的な意志が強く作用する場合が多い。これは備蓄錢中に悪錢がほとんど含まれず、精錢で構成されるという現象（鈴木一九九二）に象徴される。また、中世末期から近世にかけて墓に副葬される六道錢も、地域によって錢種構成が異なることが指摘されている（櫻木一九九二b・鈴木一九九六）が、これが人為的な選択行為のフィルターを透過した結果である可能性も充分考慮する必要がある。これに対して、②の廃棄・遺棄錢は、紛失や災害による遺棄や錢そのものの劣化による廃棄を主因としているため、錢種に関してまったく人為的な選択意志が作用せず、偶

出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通(小畑)

然に支配される度合いが高く、流通錢種そのものを反映しているといえる。つまり埋納錢はこの流通錢に包括される性格のもので、錢貨流通について議論するときある種限定的使用を余儀なくされる。よって、この廃棄・遺棄錢の錢種構成と時間的変遷を明らかにすることは、錢貨流通の実相を説明することであり、出土錢貨研究の基礎をなすものである。

これまでの錢貨研究は枚数が多量で例数の豊富な備蓄錢を主な対象として行われてきた。そしてこの全国的な集成と分析作業によって、錢貨流通のあらましと問題点が明らかにされた(鈴木一九九二)。しかし、備蓄錢は十三世紀中頃以降にしか存在せず、しかも地域によってその出現する頻度が異なるなど、地域・時代を均質にカバーしていない。にもかかわらず研究対象の主流となり得たのは、その豊富な錢種と膨大な錢量であって、これに比して廃棄・遺棄錢がきわめて微量であることが、これまであまり省みられることのなかった大きな理由であらう。しかし、最近の中・近世遺跡の発掘事例の増加は、廃棄・遺棄錢に限らず、これまで偶発的にしか発見されなかった一括埋納錢などの発見をもたらすなど、かなりの錢貨資料を蓄積してきている。また、都市遺跡のみならず山間の集落や山城に至るまで調査が実施され、錢遣いの多様な局面を議論する上で充分な比較材料となりつつある。

このような研究背景と先の方向性に基づき、九州・沖繩の中世を対象とした錢貨流通の様相を明らかにしようとするのが本論のねらいである。この地域は、該期における錢の供給地である中国に地理的に最も近く、しかもその日本への流入口でもある。よって中国の政治的・経済的動向を最も鋭敏かつ如実に反映する地域であり、この地域の錢種構成を調査することによって、日本へもたらされた初期段階の錢貨の純粹な姿を知ることができる。この作業を通じて得られた結果は、周辺地域とくに東日本地域との比較によって、錢が流通する過程においてどのように変質するのかを検討する基礎資料とならう。

今回は九州・沖繩地域の錢貨出土遺跡六八四地点の集計結果をもとに、博多遺跡群の錢貨の時期変遷と錢種構成の特質を基軸としながら中世前期における錢貨流入の問題を検討し、さらに大型錢の分布と出土状況の分析を加味して、この地

域の錢貨流通システムについて考察する。

二、貿易都市博多における錢貨流通

(一) 博多遺跡群の錢貨出土状況

西都大宰府の外港として出現し中世貿易港として発展を続けた博多は、經濟史的にみても重要な拠点でありながら、発掘調査において錢貨が出土することが自明のごとく扱われ、その証拠である出土錢はこれまであまり省みられることはなかった。概説的な紹介(折尾一九八八)にとどまる中で、博多における錢を初めて集めたのは櫻木晋一である(櫻木一九九二a・一九九三)。氏はこの論文の中で、五銖錢、開元通寶、皇朝十二錢、大型錢、朝鮮錢、琉球錢、加工錢など特色のある錢や出土状況の検討を加えるとともに、博多駅前出土の備蓄錢の紹介を行っている。この時点で明らかにされた博多の出土錢は、五銖錢から文久永寶まで六三種、三、三〇三枚、無文錢や不明錢を加えると總計四、八一三枚になる。

しかし、錢の種類や枚数、錢遣いの様相が一部明らかにされたとはいえ、時期ごとの変遷については分析が及んでいない。博多は、鴻臚館の衰退以来、一一世紀を前後する頃から貿易港としての性格を強めていく。そして近世初期に福岡の町に商都としての主役を譲るまで、継続して商都として発展を続けてきた。このように古代末以来中世全般にわたるまで長期に営まれた都市遺跡の例は、全国的にみてもきわめて希であり、錢貨流通の変遷を辿る上では格好のフィールドといえよう。

博多出土錢貨のうち分析に用いた資料は、櫻木氏の集計に一九九六年までに報告された錢貨を

出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通(小畑)

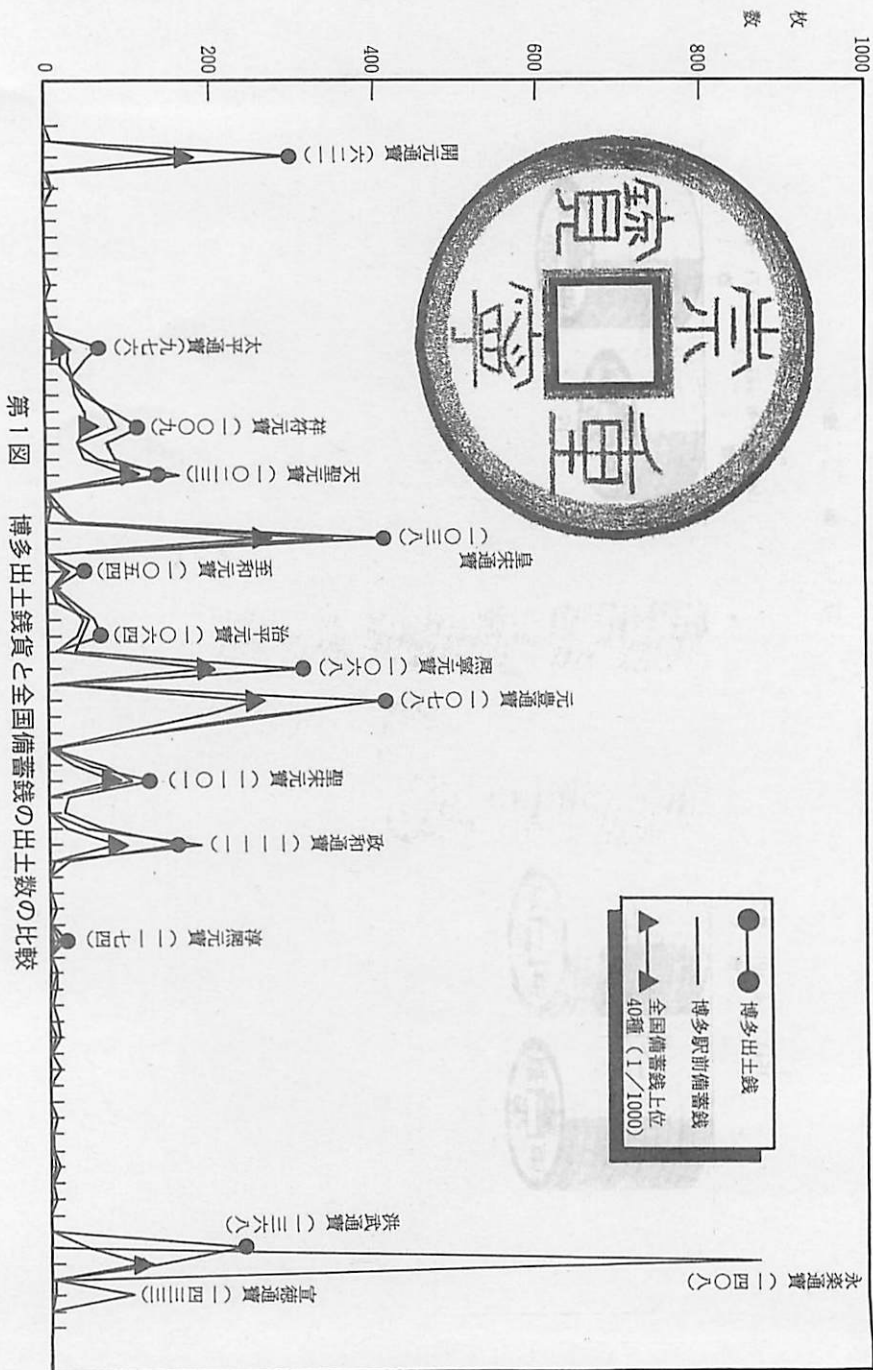
	福岡市	福岡県	佐賀県	長崎県	大分県	熊本県	宮崎県	鹿児島県	沖繩県	合計
古代錢(中世)	12	182	0	0	2	25	0	6	69	296
渡來錢(中世)	3,997	1,671	102	83	332	313	682	234	1,599	9,013
備蓄錢(近世)	3,877	223,137	19,965	4,165	15,386	22,888	59,027	18,071	449	366,965
近世無文錢(鳩目)	1,911	2,783	283	195	2,120	74	124	418	1,069	8,977
不明	3	3	0	3	1	20	38	20	736	824
合計	4,833	47	44	275	5	6	43	548	1,714	7,515
合計	14,633	227,823	20,394	4,721	17,846	23,326	59,914	19,297	5,638	393,590

第1表 九州・沖繩地域出土の錢種と枚数集計表

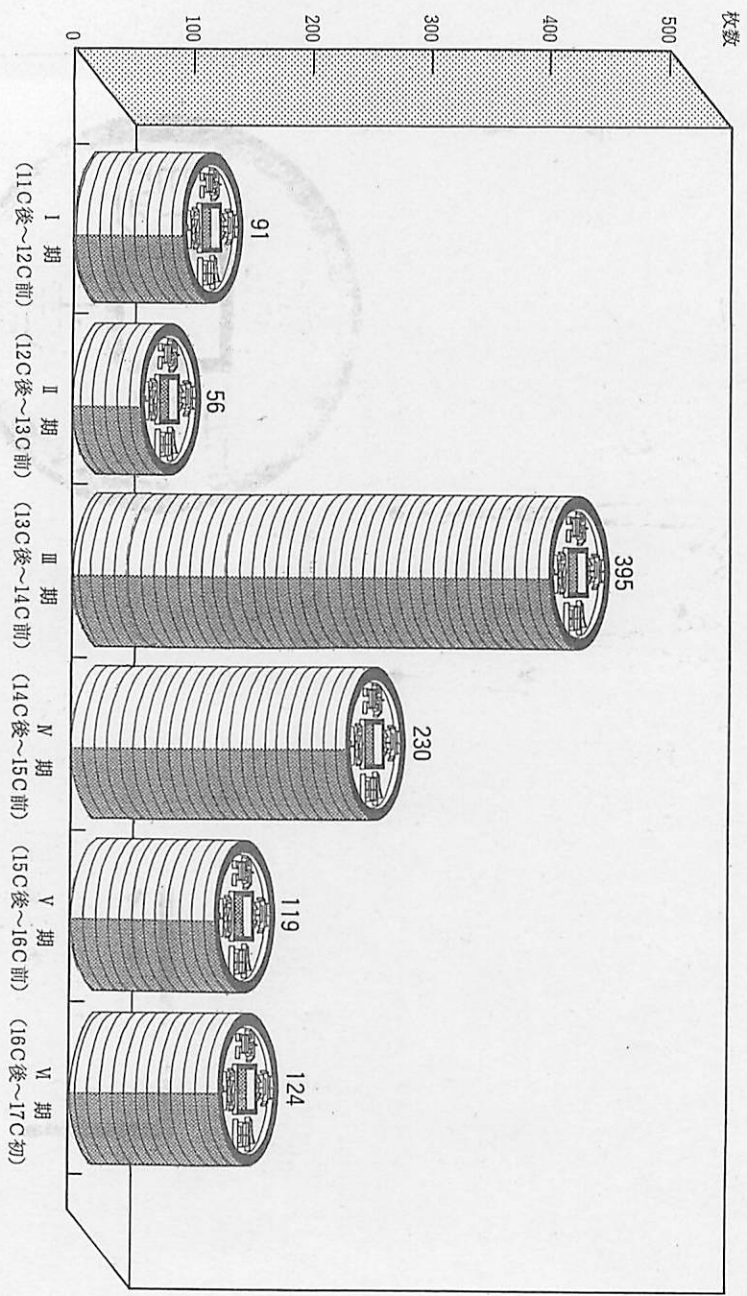
出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通（小畑）

加えた総数八、九三五枚である。博多が旺盛な錢遣いの舞台であったことは、その群を抜いた出土枚数が物語っている。九州・沖繩地域の枚数の判明した例を集計した結果、錢貨の出土総量は三九三、五九〇枚であり、うち備蓄錢が三六六、九六五枚と九割強を占める（第1表）。この備蓄錢を除く二六、六二五枚のうち、博多がその三割強を占めている。また錢名の判明した中世の渡来錢に限ると、九、〇二三枚のうち実に四割に近い三、八一九枚を占めている。さらに錢名不明錢や無文錢を加えると、半数に達する。次に出土量の多い琉球王朝の所在地である沖繩県や大宰府を擁する福岡県が二割強と一割であることを考え合わせると、いかに博多の錢貨出土量が多いかが分かるであろう。

錢種は、判明した三、八一九枚（寛永通寶を除く）のうち、元豊通寶（四一〇枚）、皇宋通寶（四〇六枚）、熙寧元寶（三〇七枚）、開元通寶（二九六枚）、元祐通寶（二七六枚）などの唐・北宋錢が主要五位を占める。これに次ぐのが明錢の洪武通寶（二三八枚）である。全体的な錢種構成と出土数は、全国備蓄錢の主要四〇種（鈴木一九九二）の傾向とほぼ一致する。これは博多駅前備蓄錢についても同様である（第1図）。若干の違いは明錢の洪武通寶と永樂通寶の出土数の順位が、備蓄錢と逆転している点である。これは、一見九州において洪武通寶が基準通貨となるという指摘（櫻木他一九九五）を裏付ける現象であるが、博多駅前備蓄錢に永樂通寶が多く含まれていることを考えると、両者の間にさほど差はなかったものと考えられる。博多駅前備蓄錢に永樂錢の割合が多いのは、当地が日明貿易に関与していた大内氏の所領でもあり、明制錢のうち宣徳通寶と永樂通寶の通用が撰錢によって強要され、その結果退蔵された可能性を考えるべきである。次に時期ごとの変遷をみてみよう。時期分けは、陶磁器の編年から設定された六期区分、Ⅰ期（一一世紀後半～一二世紀前半）、Ⅱ期（一二世紀後半～一三世紀前半）、Ⅲ期（一三世紀後半～一四世紀前半）、Ⅳ期（一四世紀後半～一五世紀前半）、Ⅴ期（一五世紀後半～一六世紀前半）、Ⅵ期（一六世紀後半～一七世紀初頭）を採用した。八、九三五枚のうち寛永通寶二八一枚を除く中世の錢で、出土遺構の時期が判明したものは約一、二割の一、〇一五枚、うち錢種まで判明しているのはその約半数の五二七枚である。これらの時期ごとの出土枚数の増減をみると、博多では他都市に先駆けて一一世紀

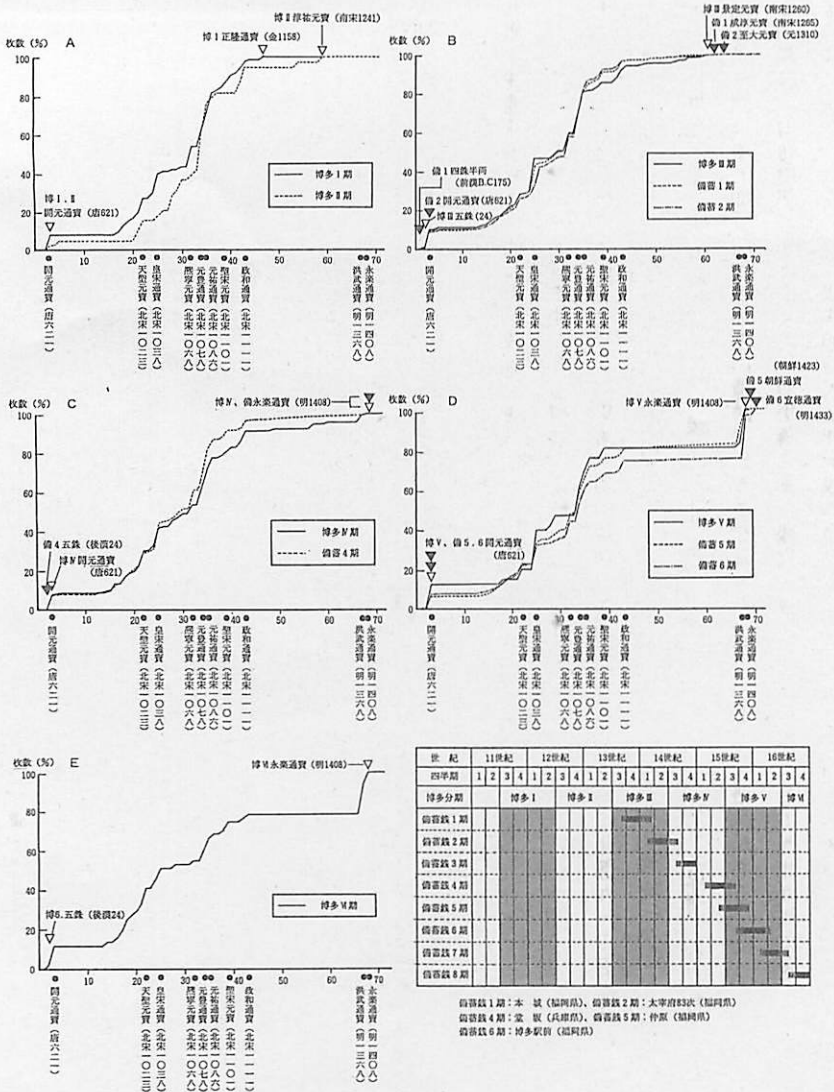


出土錢貨にみる中世九州・沖縄の錢貨流通（小畑）



第2図 博多遺跡群出土錢貨時期別出土数グラフ

出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通（小畑）



第3図 博多遺跡群出土銭貨と備蓄銭の時期別累積グラフ・博多遺跡群の分期
 備蓄銭の時期対照表（備蓄銭の分期は鈴木1992による）

出土錢貨にみる中世九州・沖縄の錢貨流通（小畑）

後半段階からすでに錢が普及していることを知る事ができる（第2図）。これは、確実に古代に属する皇朝十二錢がわずかであることから、量的な急増といえる。また、全期を通して出土量のピークは一三世紀後半から一四世紀前半であり、備蓄錢を含めた全国的な出土錢の増加傾向に合致する。その後は減少傾向にあり、これも全国的な趨勢と一致している。

時期別の錢種構成は周辺の備蓄錢例と比較した第3図にみるように、時期ごとにほぼ同じ傾向をとることがわかる。ただし、細かく見れば、BとCのように一三世紀後半から一五世紀前半にかけては、博多の場合、南宋錢の占める比率が若干高い傾向がある。これは新安沈没船に代表される寺社造営料唐船などによって輸入された錢の実相を表しているものと考えられる。また、Eのように一六世紀後半段階においても、この時期の備蓄錢に入らないとされる（永井一九九六b）五銖錢が含まれており、これも備蓄錢と本来の流通錢の違いを示すものであろう。

これらの古代末から中世前期の博多における錢貨流通の時期別変遷を、錢貨流通の画期として置き換えるなら、I期—初期流入期、II期—浸透期、III期—大量輸入期と呼びかえることができる。

(二) 九州・沖縄各地および他都市の錢貨流通

次にこの博多の成果を周辺地域や他の都市遺跡と比較してみよう。

I期まで溯る確実な資料は存在しないが、集落の開始時期がこの時期まで溯る例は北部九州の沿岸部に認められる。福岡市蒲田遺跡（一一末—一四世紀）、長崎県榎田遺跡（一一後—一四世紀）、宮ノ下り遺跡（一〇—一四世紀）、深掘貝塚（一一末—一二世紀）、熊本県浜崎遺跡（一一後—一五世紀）などがあるが、いずれも玄界灘・有明海に面した集落である。鹿児島県においても加世田市上加世田遺跡のようにやはり沿岸部に立地する遺跡がある。

次のII期にはこの海岸部に加えて、内陸の集落にまで錢貨が浸透する。依然として西北九州に多い。福岡県甘木市の真奈坂遺跡では三、九一八枚のさし錢状態の大量埋納錢が発見されており、同じ朝倉地区の中道遺跡や久留米市の茶臼山遺

跡、行橋市の椿市廃寺なども一二世紀後半代の出土例である。福岡市田村遺跡や板付遺跡などもこの時期にあたる。佐賀県では唐津市見借遺跡や天神掘遺跡などの玄海灘以外に有明海側の武雄市南永野遺跡や小城郡の赤司遺跡など有明海沿いの佐賀平野でも増加傾向にある。大分県や宮崎県においては集落での出土は次の段階を待たねばならないが、西都市西部原三五号墳の経塚出土銭にみるように一二世紀の前半代（Ⅰ期）に遡る例があり、早い時期に銭が浸透している可能性がある。

Ⅲ期の段階になると、銭貨出土遺跡は一挙に増加する。九州・沖繩各地への銭貨の浸透は、遺跡数の増加に加えて、銭貨出土量そのものが前代と比べて飛躍的に大きくなることから窺える。さらに北九州市本城備蓄銭にみられるように備蓄行為がこの段階に開始されるなど、大量の銭貨流入を背景とした銭貨流通の一大変革ともいべき現象である。博多周辺の農村部や大分県や宮崎県の内陸の集落への浸透時期もこの頃である。

Ⅳ期以降の一五〜一六世紀にかけては、集落遺跡に加えて備蓄銭や山城や居館での出土が増加し、北部九州においては祭祀遺構や墓などからの出土例が増えてくる。

他都市の状況をみると、鎌倉における銭貨の出現時期は、都市の成立よりやや遅れる一三世紀第二〜第三四半世紀で、最も普及するのは一四世紀代である（河野一九九三）。また平安京においては経塚や地業などの祭祀関係遺構から一二世紀後半に出現しているが、数量も少なく、本格的な銭貨量の増加は後の一三世紀以降である（山田一九九四）。大宰府においては、出土銭貨の主体は一三世紀後半の所産であるが、その宋銭流入の萌芽は博多と同じ一世紀末に位置づけられる。また、沖繩においては、貝塚時代後期に開元通貨の使用が認められるものの、銭貨が増加し始めるのはグスク時代を待たねばならない（高宮一九九五）。しかし、グスク時代の初期にはあまり普及しておらず、その普及時期は一四世紀以降という指摘（嵩元一九八三）もあるように、一三世紀末以降の陶磁器を伴う遺構や包含層からの出土が多いようである。

次に都市と農村部の比較を行うために、博多近郊の集落遺跡の出土量と時期の比較を行う。福岡市内の博多以外の遺跡

出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通（小畑）

の出土錢貨を検討してみると、時期的には先に述べたように一二世紀も後半のⅡ期の段階に錢遣いの兆しが認められるようになる。出土数を比較すると、中世渡来錢（無文錢・不明錢含む）が博多の八、六五四枚に対して一七七枚と、博多のおよそ二％にすぎない。その中でも日宋貿易や日明貿易の拠点の一つと考えられる今津正権院や戸原麦尾の出土錢貨は比較的多いが、農村集落や内陸の山村部の遺跡の出土枚数はわずかである。また中世末の居館遺跡の有田遺跡においても飛び抜けた枚数は得られていない。早良平野最深部の山間の臨山遺跡においてさえ龍泉窯産の陶磁器が多量に出土していることが端的に示すように、博多近郊の集落遺跡では主要貿易品の一つである中国製や朝鮮王朝製の陶磁器が他地域の集落遺跡に比べ量的に多く流通している。これは、さきの錢遣いの低調さからみると、商業經濟の発達と錢遣いとは別次元として、米や木炭などの産物との直接交換による取引が行われたと考えるべきである。

（三）錢貨流通史からみた博多の位置づけ

以上各地の出土例をみてきたが、改めて博多の錢貨出土量の圧倒的な優位性とⅠ期の錢遣いが際立った現象として理解されよう。文献やこれまでの貨幣流通史の研究によれば、わが国における渡来錢の流入時期としては売券文書にみるほぼ一二世紀中ごろから後半が定説化している（滝沢一九九六）。その契機は対北宋貿易の外部的貨幣としての流入であり、宋錢の流通が活発化してくるのは平清盛の福原開港以降の一二世紀の末とされる。この時期には錢使用を原因とする京都での物価の不安定を引き起こし、錢使用に関する公卿の討論や錢使用の禁止措置など、急激な錢の市場への浸透が巻き起こした經濟不安が発生した。しかしこれはいわば新しい時代の流れへの抵抗であって、すでに市場における錢遣いへの傾斜は引き戻すことができず、一三世紀初頭には朝廷や幕府も錢の使用を認めざるをえなかった。裏返せば、すでに錢による決済がある程度商品取引において定着していたのであり、文献に現れる以前から錢が普及していたことが予測される。

このような錢貨流通史の見解と比較すると、先にみたⅡ期以降の九州・沖繩地域における錢貨の出土状況は、おおよそ

これを支持するものである。しかし、改めて特記されねばならないのはⅠ期の博多における錢貨流通の実態である。この博多Ⅰ期は、白磁の大量輸入や宋商人名を記した多量の墨書陶磁器に象徴されるように、博多における宋商の住蕃貿易の時代に相当する。後述する大型錢とともに、貿易の対外的貨幣として多量に博多に宋錢が持ち込まれたことを示している。博多近郊の集落遺跡の錢造いの様相と比べると、外国との商業取引の活性化した都市における特異な現象ともいえる。この段階ではまだ国内の内部貨幣としての転換ははかられず、局所的な流通であったと考えられる。

また、蛇足であるが、さきのⅡ期における減少傾向を積極的に評価するならば、南宋における銅禁政策、もしくは貿易船の博多を経由しない福原への直接入港などの諸因をあげることができよう。しかし、この時期には都市近郊や沿岸部の遺跡において錢貨が確実に浸透してきている。

では、この地域における銅錢がいかなる性格のもとで使用されているか、とくに東日本地域との錢造いの違いを浮き彫りにするため、この九州・沖繩地域を特徴づける大型錢を手がかりに考察してみよう。

三、大型錢と錢貨流通システム

(一) 中国の大型錢

中国の大型錢は、北宋期には慶曆重寶の当十錢に始まり、明代まで継続して鑄造されている。銅錢の他に鉄錢も鑄造されたが、この鉄錢にも大型錢があり、北宋の慶曆以降、北宋後期から南宋前期にかけて、銅錢のみで社会の財政支出が支えきれないときや、流通貨幣の不足が深刻なとき、あるいは銅錢の国外流出を防止するために陝西や河東で発行された(宮澤一九九三a)。本邦では今のところ鉄錢は小平錢さえ発見されていないとされる(永井一九九六b)。北宋く明までの大銅錢と本邦出土の大型錢を示したのが第2表である。これによると銅錢の折二錢を中心に北宋・南宋発行のものはほとんど発見されているが、未発見の種類もある。中国における大型錢発行と流通システムについては宮澤論文(宮澤一九

出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通(小畑)

出土銭貨にみる中世九州・沖繩の銭貨流通(小畑)

九三b)に詳しいので、以下にその概要を引く。

中国における大銅銭は、当十銭、当五銭、当三銭、折二(当二)銭がある。当十銭は北宋の慶暦元年(一〇四一年)に陝西で対西夏戦争の軍事費を捻出するために発行された。この慶暦重寶の重量は、小平銭の三倍にあたる約一々であるため、発行後まもなく私鑄が横行した。このため七年後の慶暦八年には当三銭に改められ、さらに私鑄がおさまらないため、後に額面が当二とされた。このように、大型銭や鉄銭はその生産費が額面に対して低く押さえられるため、私鑄の格好の対象とされ、その対策として額面の低下措置がとられることがしばしばであった。折二銭は慶暦以後陝西で流通したが、熙寧六年(一〇七三)以降は在京および開封府界を除く全国で流通するようになった。その後在京および開封府界での通行が図られたが、国都では信用を勝ちとることができず、京師とその周辺ではほとんど流通していない。折二銭は地方貨幣としては広く出回り、私鑄問題もほとんど発生しなかった。これは、熙寧以後

国	銭名	初鑄年代	銅 銭					開禧元寶	1205				
			折二	当三	当五	当十	極大						
北 宋	慶暦重寶	1045				●		1208	●				
	至和重寶	1054	○					1208		○			
	熙寧重寶	1071	●					1208					
	元豊通寶	1078	●					1208					
	元祐通寶	1093	●					1208					
	紹聖通寶	1094	●					1225	○	▲			
	紹聖通寶	1094	●					1228					
	元符通寶	1098	●					1228					
	聖宋重寶	1101	●		○			1234		●	●		
	聖宋重寶	1101	●					1237		●	●		
	崇寧通寶	1103	○	○				1241		●	●		
	崇寧通寶	1103	○	○				1241					○
	大觀通寶	1107	○	○	○			1253		●	●		
	政和通寶	1111	●	○				1259		●	●		
	宣和通寶	1119	○					1260		●	●		
	靖康元寶	1126	○					1265		●	●		
南 宋	建炎通寶	1127	●	○				1204	○				○
	紹興通寶	1131	●					1204					○
	紹興通寶	1131	●	○				1310	○		○	●	
	隆興元寶	1163	●					1350	○	▲	○	○	
	乾道元寶	1165	●					1350		○	○		
	淳熙元寶	1174	●					1361		●	●		
	紹熙元寶	1190	●					1368		●	●	▲	○
	慶元通寶	1195	●					1527		○			○
	嘉泰通寶	1201	○	○				1621					○
	開禧通寶	1205	▲					1628		○			○
南 宋	開禧通寶	1205						1647	○				○
	嘉定通寶	1208						1204					
	嘉定元寶	1208						1204					
	嘉定元寶	1208						1310	○		○	○	
	嘉定元寶	1208						1350	○		○	○	
	嘉定元寶	1208						1350	○		○	○	
	嘉定元寶	1208						1361		●	●		
	嘉定元寶	1208						1368		●	●		
	嘉定元寶	1208						1527		○			○
	嘉定元寶	1208						1621					○

第2表 中国鑄造の大銅銭と本邦出土
(●は本邦既発見のもの：▲は今回確認したもの)

の折二銭の質が小平銭にほぼ等しく、また重量がそのほぼ二倍であることから、採算があわなかつたためとされる。また、国都での流通が未発達であった理由として、国家的信用力が小平銭の形状にあつたため、小平銭以外のものが排除されたと考えられている。このようにみても、小平銭以外の大銅銭は主に地方で流通した貨幣ということができよう。しかし、折二銭は地方での大量鑄造と回収により、その信用を勝ちとり、南宋の時期になると国都でも通用するようになった。わが国でもっとも多く出土している当十銭は、崇寧年間に鑄造された崇寧通寶と崇寧重寶である。これらは小平銭に比べて品位が低いため、発行後間もなく激しい私鑄を巻き起こし、崇寧四年から五年にかけて、行使地区の江北への限定、江南での当五銭さらに当三銭への切り下げ、鑄造停止と小平銭鑄造の再開、華北での当五銭への切り下げなどと、当十銭政策は崩壊の一端を辿った。これに対して折二銭は小平銭とともに南宋の主要貨幣として流通した。慶元（一一九五—一二〇〇年）ころの鑄造年額一五万貫のうち、小平銭一万八千貫、折二銭六万六千貫と、額面において実に八十八%に及ぶという。

(二) 日本における大型銭の出土状況

出土銭貨において折二銭や当十銭などの大型銭が存在することはかねてから知られていたが、備蓄銭研究が主流を占めた研究情勢にあつて、ある種異質なものとして正面から取り扱われることはなく、その地位回復は最近のことといえる。櫻木晋一によって博多での崇寧通寶などの出土が注目されて（櫻木一九九二a）以来、崇寧通寶・重寶・大観通寶の当十銭の集成（永井編一九九四）が行われ、さらには全国の都市遺跡から出土する当十銭に関する考察も行われるようになった（嶋谷一九九四b）。これら大方の大銅銭に対する評価は、銭としては嫌われ貨幣として流通していなかつたというものがほとんどで、大型銭の周囲の外郭を削った磨輪銭の存在や備蓄銭中に含まれないことを理由に日本での流通貨幣としての使用を否定的に考える見解（尾形一九八五・櫻木一九九三・永井一九九六b）、またその呪術物としての機能やさしの

出土銭貨にみる中世九州・沖繩の銭貨流通（小畑）

「あて銭」としての使用法を想定する見解（河野一九九三・福島一九九四）などがある。しかし、先に見たように南宋において折二銭は主流貨幣として機能しており、そのすべてを流通貨幣から除外してしまうのは危険である。当十銭が単独で消費され、博多と堺の出土量の差を地理的要因に加えて時代差として捉えるという、流通貨幣としての機能を付与した見解もある（嶋谷一九九四b）。さきの流通貨幣としての否定的見解には、この嶋谷氏の視点のような時期的かつ地理的要因がまったく考慮されていない。この点を検討するため、備蓄銭および遺跡出土の大型銭の集成を試みた（第3表）。なお備蓄銭に含まれる大型銭に関する情報は永井による出土銭の集成（永井編一九九四・一九九六）を基本とした。

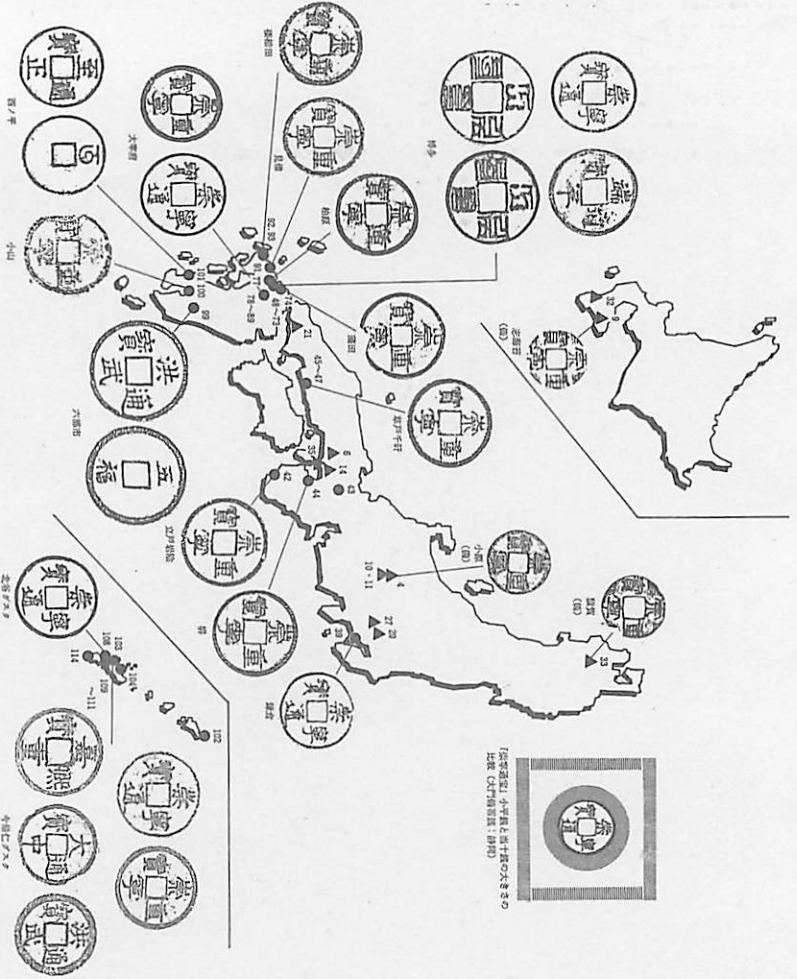
備蓄銭は基本的に小平銭で構成されるが、わずかながら大型銭が含まれている。これは折二銭を中心とするもので、崇寧通寶などの当十銭はほとんど含まれていない。当十銭が入る場合でも、志海苔や吉田若田や猿賀のように小平銭と同じ大きさまで外郭および字の部分まで削り込んだ例や小原のように模鑄して小型化した例にみるように、本来の姿を保っていない（第4図）。また折二銭にも磨輪銭が認められることから、これらの加工銭がさし状態で使用され、同時に大型銭の額面通りに使用されず、小平銭と同じ一文としての通用価値しか持たなかった証拠となる。このような加工銭はすでに一三世紀後半の備蓄銭中にその萌芽が認められるが、東日本を中心とした備蓄銭三期（一四世紀末）以降の備蓄銭中に多く見られることがわかる（第3表）。また、このような現象は後にのべる九州・沖繩における一般の都市や集落遺跡の出土銭中にはあまり認められず、銭に対する意識の地理的な違いを読み取ることができる。

備蓄銭中に含まれる大型銭（折二銭がほとんど）の割合をみると、一万枚以下の例を除けば〇・一％に満たないものがほとんどで、兵庫などの西日本に多く西高東低の状況にある。

備蓄銭以外の一般遺跡から出土する大型銭は、実際は折二銭が主体を占めると思われるが、銭径が小平銭に近いため、記載漏れに起因するデータ回収率の悪さを考慮せねばならない。現状の資料では折二銭は当三銭以上の大型銭とほぼ等しい比率で出土している。また、出土銭中の大型銭の割合は、博多を例にとれば約〇・七八％と、備蓄銭に比べ断然高い。

出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通(小畑)

第4図 日本各地出土の大聖銭(当三以上) (▲は備蓄銭:●は遺跡出土銭) 図中の番号は第3表の番号と一致する



出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通(小畑)

番号	遺跡名	遺跡の位置	出土品	大正時代の割合		
				出土品の数	割合	
1	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	28923	0.018
2	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	6	13745	0.048
3	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	1	16572	0.005
4	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	1	1071	0.098
5	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	9	1101	0.048
6	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	41	5119	0.160
7	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	183	7009	0.183
8	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	772	0.183
9	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	20	37428	0.018
10	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	3502	0.081
11	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	27013	0.018
12	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	292	19425	0.183
13	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	8181	0.078
14	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	101912	0.025
15	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	14559	0.018
16	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	6	14502	0.025
17	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	6	13483	0.018
18	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	3	7670	0.048
19	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	12	10428	0.128
20	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	292	19425	0.183
21	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	1	3500	0.025
22	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	8	5073	0.183
23	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	28252	0.018
24	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	2	16294	0.018
25	筑前 豊後	豊後 豊後	大正時代	4	8752	0.025

◎は模範銭の可能性のあるもの、●は外部を削った加工銭、△は形状不明のもの；●は大量埋納（埋蔵）銭以外の発掘調査によって発見されたもの

出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通（小畑）

第3表 大型銭（銅銭）出土遺跡とその種類

遺跡名	種類	数量	備考
101	長門	1	
102	長門	1	
103	長門	1	
104	長門	1	
105	長門	1	
106	長門	1	
107	長門	1	
108	長門	1	
109	長門	1	
110	長門	1	
111	長門	1	
112	長門	1	
113	長門	1	
114	長門	1	
115	長門	1	
116	長門	1	
117	長門	1	
118	長門	1	
119	長門	1	
120	長門	1	
121	長門	1	
122	長門	1	
123	長門	1	
124	長門	1	
125	長門	1	
126	長門	1	
127	長門	1	
128	長門	1	
129	長門	1	
130	長門	1	
131	長門	1	
132	長門	1	
133	長門	1	
134	長門	1	
135	長門	1	
136	長門	1	
137	長門	1	
138	長門	1	
139	長門	1	
140	長門	1	
141	長門	1	
142	長門	1	
143	長門	1	
144	長門	1	
145	長門	1	
146	長門	1	
147	長門	1	
148	長門	1	
149	長門	1	
150	長門	1	
151	長門	1	
152	長門	1	
153	長門	1	
154	長門	1	
155	長門	1	
156	長門	1	
157	長門	1	
158	長門	1	
159	長門	1	
160	長門	1	
161	長門	1	
162	長門	1	
163	長門	1	
164	長門	1	
165	長門	1	
166	長門	1	
167	長門	1	
168	長門	1	
169	長門	1	
170	長門	1	
171	長門	1	
172	長門	1	
173	長門	1	
174	長門	1	
175	長門	1	
176	長門	1	
177	長門	1	
178	長門	1	
179	長門	1	
180	長門	1	
181	長門	1	
182	長門	1	
183	長門	1	
184	長門	1	
185	長門	1	
186	長門	1	
187	長門	1	
188	長門	1	
189	長門	1	
190	長門	1	
191	長門	1	
192	長門	1	
193	長門	1	
194	長門	1	
195	長門	1	
196	長門	1	
197	長門	1	
198	長門	1	
199	長門	1	
200	長門	1	

出土銭貨にみる中世九州・沖繩の銭貨流通（小畑）

当三銭以上の大型銭は、今のところ鎌倉以西の地域からのみ出土している。総数一〇〇枚のうち、九州以外が一〇枚（一〇％）、博多が三七枚（三七％）、博多周辺が二枚（二％）、大宰府が一四枚（一四％）、長崎・佐賀・宮崎・鹿児島が六枚（六％）（大分・熊本県ではいまのところ未確認）、奄美・沖繩が三一枚（三％）と、今回の集計においても、その量は沖繩を除くと、かつていわれたように博多と大宰府が大半を占める（永井一九九六b）。沖繩の場合は南宋後期や明の大型銭も含まれることや、グスタクや首里城およびその周辺からの出土が多いことから、一四世紀以降の対明貿易の所産であると考えられる。これに対して、九州においては博多・大宰府といった日宋貿易以来日本の門戸として栄えた町に大型銭が集中している。また、松浦や唐津などの貿易船の航路にあたる九州西北岸の遺跡や博多湾東岸に面した蒲田遺跡や博多近郊の元寇の恩賞地である柏原遺跡などに出土することは興味深い。また、当十銭ではないが折二銭が有明海に面した佐賀や熊本などの遺跡から発見されており、有明海貿易の実態を知る上で貴重である。

(三) 流通銭としての大型銭

これらの大型銭の大半は一三世紀後半以降に属するものである。しかし、注目しなければならないのは、第5表にみられるように博多では銭

国	銭名	初鋳年代	11~12c	12~13c	13~14c	14~15c	15~16c	16c~	その他	TOTAL
北宋	應寧重寶	1071	0	1	0	0	0	0	5	6
北宋	元祐通寶	1078	0	1	3	1	0	0	4	9
北宋	元祐通寶	1093	0	0	1	0	0	0	1	2
北宋	紹聖元寶	1094	0	0	1	0	0	0	0	1
北宋	聖宗元寶	1101	0	0	1	0	0	0	3	4
北宋	政和通寶	1111	0	0	0	0	0	0	1	1
北宋	宣和通寶	1119	0	0	0	0	0	0	1	1
南宋	紹興元寶	1131	0	0	0	0	0	0	1	1
南宋	淳熙元寶	1174	0	0	1	0	0	0	0	1
南宋	開禧通寶	1205	0	0	0	0	0	0	1	1
	不明		0	0	0	0	0	0	4	4
合	計		0	2	7	1	0	0	21	31

第4表 博多遺跡群出土の折二銭の時期別出土数

国	銭名	初鋳年代	11~12c	12~13c	13~14c	14~15c	15~16c	16c~	その他	TOTAL
北宋	慶曆重寶	1045	0	0	0	0	0	0	1	1
北宋	崇寧通寶	1103	3	0	2	2	0	0	13	20
北宋	崇寧重寶	1103	1	0	1	0	0	0	11	13
北宋	大元通寶	1310	0	0	0	0	0	0	2	2
合	計		4	0	3	2	0	0	27	36

第5表 博多遺跡群出土の当十銭の時期別出土数

貨の初期流入期の一二世紀初頭にすでに大型銭(当十銭)が流入している事実である。また、大宰府においても一三世紀後半以降の例が主体を占めるが、第三八次調査のS.XⅠ八六三の墓に白磁碗とともに副葬された崇寧通寶当十銭が示すように、他都市の例に比べ早い段階に大型銭が認められる。これは当地における大型銭を含めた銭貨が、北宋における価値基準のまま、しかも発行後間もなく貨幣として流通していることを示し、権衡資料(吉村一九九五)とともに博多における宋商の住蕃貿易を示す新たな証拠として加えられるべきものであろう。おそらく唐津や松浦地方の見借、椋楳田、宮ノ下り遺跡例などもこの初期段階の大型銭である可能性が高い。

Ⅲ期以降の段階においても九州や沖繩においては、中国本土と連動しながらさきのような流通形態が継続していったものと考えられる。つまり南宋で地方貨幣として一定盤折二銭が使用されたように、日本とくに西日本において、折二銭に加えて当十銭自体も当五ないし当二の額面として流通していたと考えられる。その根拠として商業活動の拠点である都市遺跡や港を擁する海岸部に面した遺跡などでは、後代になっても依然として当十銭が入り、しかも加工されていない。また、慶元を出港し日本へ向かっていた新安船には至大通寶(一三一〇年初鑄)を最新銭とする多量の大型銭が積載されており、その釣寂庵(博多承天寺塔頭)宛ての荷札が示すように、八貫もの大銭がさしの状態で博多へ運ばれようとしていた。これは大型銭を使用する意図のもとに輸入しようとしたもので、一四世紀段階に至っても大型銭の流通貨幣としての市場における信用が失墜していなかった証である。同様なことは一三世紀末以降の沖繩のグスク交易や琉球王朝の対明勘合貿易においてみることができ、大型銭が頻繁に使用されていたことが出土総数の一・一三%というきわめて高い含有率から窺い知ることができる。

九州地域では博多や熊本市井芹川河口で折二銭の磨輪銭が二点発見されているが、残念ながらその所屬時期は明確さを欠く。このような現象は沖繩においてまったく認められないし、先の二例を除くと兵庫県以東の東部日本に集中していることから、中世の日本の流通形態として把握されよう。この日本的な銭遣いの成立は、おそらく備蕃行為の発生とともに、

出土錢貨にみる中世九州・沖縄の錢貨流通(小畑)

無文錢の流通や本邦における模鑄錢作りが開始される一四世紀以降に求められるかもしれない。この時期は錢貨流通においても大きな転換期として認識されている(神木一九八六・一九九五)。さらに、無文の大型錢や大型錢自体の模鑄が行われなかったことは、この地域において小平錢に対する信用がより強かったことを物語る。これは皇朝十二錢以来の小型銅錢に慣れ親しんだ伝統に由来するというより、むしろ地域的な錢種に対する信用度の違いであり、中国との距離や情報の入りやすさの差にその原因を求められよう。一方、貿易の盛んな地域や都市では、依然として商品取引の決済手段として対外的貨幣として機能しつづけたのである。裏返せばこのような地域は、中国を中心にした環東アジア貿易圏のうちであり、その内部貨幣としての錢貨流通システムに取り込まれていたと結論づけられる。

四、まとめ

以上、本論の論旨を総括すると、博多およびその周辺では他地域に先駆けて一一世紀末〜一二世紀初めの早い段階に錢の流通が認められ、宋商の博多への居留による貿易形態を示す証拠となること、また、錢貨の出土量の増加や周辺集落への普及が一三世紀後半〜一四世紀前半にかけて認められ、全国的な傾向として捉えられること、大型錢の分布と使用時期・形態から、この一四世紀以降には内部貨幣としての日本的錢遣いが確立し、地域的な違いが醸成されたこと、貿易都市およびその周辺では、外部的貨幣として東アジア貿易圏の錢遣いをそのまま受け入れ、それを維持し続けたことなどである。

しかし、ここで問題となるのは、中世日本の錢貨流通に対する中国側の研究の相反する二説である。一方は錢貨の流通基盤として、国家的支払い手段としての貨幣、つまり国家が必ず受け取るという信用が不可欠である(宮澤一九九〇、足立一九九〇a)という立場から、中世日本の錢貨流通システム自体も中国の内部貨幣に取り込まれたものであったとする説(足立一九九一)。これに対して、他方は日本の錢貨流入量のピークを供給側である中国の國家変成時期(金・元王朝の

成立)に符合するものとし、銅銭を不要とする国家の成立によって銅貨の国外への大量放出がこの時期に行われたと推定し、錢貨流通において国家の信用など必要なかったとする説である(大田一九九五)。

ここにおいても、日本という地域もしくは中世という時期を一括して捉えることに問題がある。少なくとも先に述べた日本の錢造いが成立する一四世紀以降には、中国の内部貨幣に取り込まれた日本ではなくなる、たとえ領土制のものと地域的に限定されたものとはいえ、国家に代わる支配者による錢貨の放取が行われていることは錢貨流通の信用形成の基礎と成りうることに留意すべきである。よって、錢貨流通において足立氏の言う中国専制国家の国家的信任が影響しえた時期は、博多にみるⅠ期ないしⅡ期に限定されるべきではないだろうか。さらに、これより後には東アジアとの貿易(勘合・私貿易)圏では、国家の保証を要しない市場における信用が確立していた可能性がある。明代後期の銅貨が国家的信用を失った時点でさえ、市場において独自の信用を形成した(足立一九九〇b)ように、この東南アジアを含めた環東シナ海商圏(沿岸部)では市場独自の信用をもつ錢体系が成立していたとしても不思議ではない。明制錢が発行された時点においても北宋錢が巷で大きな信用をもって通用していたことはこれを示唆している。また、大田説に従えば大型錢は額面通りに使用できない錢貨として排他的なものとなるはずである。しかし、九州・沖縄の港湾都市や堺や京都などにおいて一六世紀段階まで使用され続けていることは、上記説を補強するものであろう。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、次の方々にお世話になりました。足立啓二、網田龍生、伊藤正彦、岡本真也、緒方俊輔、木下尚子、甲元眞之、櫻木晋一、比佐陽一郎、嶋谷和彦、杉原敏之、田邊哲夫、平ノ内幸治、藤原由博、西田道世、野田和美、藤木聡、美野口雅朗、宮代栄一、矢野希久代、山田邦和、吉武学。とくに足立・伊藤両先生には、中国関係の文献を提供いただくともにも有益なご教示をいただいた。また、櫻木晋一先生には文献入手に、野田和美嬢には資料作成におい

出土銭貨にみる中世九州・沖繩の銭貨流通（小畑）

てお手数をおかけした。衷心より御礼申し上げます。また、本論はかつて筆者が携わった博多遺跡群の発掘成果を基礎として起稿したもので、論形成においては大庭康時、佐伯弘次氏を初めとする博多研究会諸氏との日頃からの意見交換の成果に負うところが大きい。各位にも感謝の意を表したい。

【註】

- (1) 後に述べる九州・沖繩の銭貨集計の結果に見られるように、その九割が備蓄銭資料であって、不明銭や無文銭を加えても中世期の渡来銭は一七貫程度でしかない。これは統計学的にはきわめて不安定な数かもしれない。しかし、先に述べたようにこれらの積み重ねによってこそ流通銭貨の組成が初めて明らかにされると確信する。
- (2) これは「九州・沖繩における銭貨出土遺跡地名表」の成果に基づいている。これは、『熊本大学文学部考古学研究室二十五周年論文集』（一九九七年三月刊行予定）に掲載予定である。
- (3) 今回の集計においても四種一〇点であり、わずかな出土土量に加えて、古代の遺構に確実に伴うものといえはほんの数例であろう。中世に流通していた古文銭が大半と思われる。
- (4) 神崎荘に属する下中杖遺跡にみられるように、古代末から有明海を介した貿易が文献上に現れており、より古い一二期に属する出土例が早晚発見されるであろう。このような拠点的な集落は、古代の官衙関連施設の所在地もしくはそれに関連した水運の港として早くから開けたところで、同じ有明海沿いの菊池川の高瀬津や井芹川の高橋津などは、同じくより古い時期の銭遣いの候補地として今後注目すべきところである。
- (5) この場合、どれほどの銭貨の出土枚数をもって、銭貨流通の盛衰を問うかが問題となる。確かに枚数こそ少ないが、他地域（他県）に比べると銭貨出土遺跡の割合は高いと思われる。今後は、比較材料として、銭貨の出土率などの算定による基準づくりが必要である。
- (6) 永井氏によると、「鉄銭」と記載された資料はすべて銅銭であったとされる。福岡県甘木市の真奈坂遺跡の三、九一八枚の一括埋納銭には鉄銭が八枚含まれることが報告されている（福岡県教委一九九三「真奈坂遺跡」福岡県文化財調査報告書第一〇五集）。突見していないので確実なことは言えないが、一二世紀後半から一三世紀前半に時期比定されることから宋代の鉄銭の可能性があるが、先のような観察違いの可能性や時期が新しくなる可能性もある。いずれにせよ出土銭全体の分析結果が待たれる。
- (7) 今回の調査によって、これまで未発見であった洪武通寶当五銭、至大通寶当三銭（午）を新たに確認した。また新安沈没船でしか確認されていなかった開禧通寶、紹定通寶の折二銭も博多、大宰府、沖繩で出土していることが判明した。
- (8) 博多六四次調査例は、近世遺構からの出土であり、井芹川河口遺跡例はほぼ一三世紀以降の年代が与えられているのみである。
- (9) 無文銭の成立は九州において一三世紀後半に始まるとされる（是光一九九三）。この根拠は福岡県本城遺跡の備蓄銭の時期から

であるが、これは永井の時期区分法（永井一九九六a）によると一四世紀初頭まで下る可能性がある。また、本邦では京都、鎌倉、堺で模鑄銭の鑄型が発見されているが、文献やこれらの研究成果によると模鑄は一四世紀初めに開始されたことが想定されている（室森秀明一九九四、嶋谷一九九四a、永井一九九六b）

【引用・参考文献】

- 安里嗣淳 一九九一 「中国唐代貨銭「開元通寶」と琉球圏の形成」『文化課紀要』七号 一一一〇頁 沖縄県教育委員会
- 足立啓二 一九八九 「明代中期における京師の銭法」『文学部論叢』二九号 七四―九七頁
- 足立啓二 一九九〇a 「専制国家と財政・貨幣」『中国専制国家と社会統合 中国史像の再構成』二 一一九―一四六頁
- 足立啓二 一九九〇b 「明清時代における錢經濟の發展」『中国専制国家と社会統合 中国史像の再構成』二 三八―四二頁
- 足立啓二 一九九一 「中国からみた日本貨幣史の二・三の問題」『新しい歴史学のために』二〇三―二〇四頁 一―一〇頁 京都民科研究部

会

- 足立順司 一九九六 「再び「経塚出土の銭貨」について」『出土銭貨』六号 二一八頁 出土銭貨研究会
- 池田亨 一九八六 「中世の渡来銭」『出土渡来銭』考古学ライブラリー 四五号 一三一―一三三頁
- 尾形禮正 一九八五 「出土渡来銭の觀察―主として模鑄銭について―」『考古学ジャーナル』二四九号 二三三―二六六頁
- 大田由紀夫 一九九五 「二・一五世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布」『社会経済史学』六一卷二号 二〇―四八頁
- 大庭康時 一九九五 「福岡県福岡市博多遺跡群出土の銭貨より」『出土銭貨』四号 二二―頁 出土銭貨研究会
- 折尾学 一九八八 「博多出土の古銭」『東アジアの国際都市博多』よみがえる中世 一 一三三―一三五頁
- 神木哲男 一九八六 「出土銭より見た日本の中世經濟」『出土渡来銭』考古学ライブラリー 四五号 八六―九四頁
- 神木哲男 一九九五 「貨幣史」と「經濟史」をつなぐもの」『出土銭貨』三号 一頁 出土銭貨研究会
- 河野眞知郎 一九九三 「中世鎌倉銭貨考」『創立三十周年記念鶴見大学文学部論集』二四三―二八〇頁
- 熊本大学考古学研究室 一九九七 『用具略』 研究室活動報告 三二―号
- 高良倉吉 一九九三 『琉球王國』 岩波新書 二六一
- 是光吉基 一九八六a 「日本各地出土の中世の渡来銭（九州・中国・近畿地方）」『出土渡来銭』考古学ライブラリー 四五号 三三―一四〇頁
- 是光吉基 一九八六b 「出土渡来銭の埋没年代」『出土渡来銭』考古学ライブラリー 四五号 六九―七七頁
- 是光吉基 一九九三 「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『考古論集潮見浩先生退官記念論文集』七八九―八〇〇頁 同事
- 業会
- 榮原永遠男 一九九三 『日本古代錢貨流通史の研究』 槇書房
- 櫻木晋一 一九九一 「九州地域における中・近世の錢貨流通」『九州文化史研究所紀要』三六号 八七―一二三頁

出土銭貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通（小畑）

出土錢貨にみる中世九州・沖繩の錢貨流通(小畑)

櫻木晋一 一九九二a 『博多遺跡群の出土錢貨(一)』 『法哈噠』 一号 八四―九四頁 博多研究会

櫻木晋一 一九九二b 『九州の六道錢研究の現状と課題』 『九州帝京短期大学紀要』 二号 七五―八四頁

櫻木晋一 一九九三 『博多遺跡群の出土錢貨(二)』 『法哈噠』 二号 四一―四六頁 博多研究会

櫻木晋一 一九九四 『九州地区出土の皇朝十二錢』 『出土錢貨』 一号 九一―一二頁 出土錢貨研究会

櫻木晋一・赤沼英男・市原恵子 一九九五 『洪武通寶の金屬組成と九州における流通錢の問題』 『九州帝京短期大学紀要』 七号 六一―八三頁

嶋谷和彦 一九九四a 『堺出土の鑄錢鋳型と中世後期の模鑄錢生産』 『中世の出土錢』 二二四―二四二頁 兵庫埋蔵錢調査会

嶋谷和彦 一九九四b 『一枚の錢(二)―堺環濠都市遺跡出土の「崇寧重宝」―』 『関西近世考古学研究会会報』 二五号 二一―六頁

鈴木公雄 一九九二 『出土備前錢と中世後期の錢貨流通』 『史学』 六一卷 三・四号 一一―五六頁

鈴木公雄 一九九五 『出土錢貨研究の諸問題(二)』 『出土錢貨』 三号 二―九頁 出土錢貨研究会

高官廣衛 一九九五 『開元通寶からみた先史終末期の沖繩』 『王朝の考古学―大川清博士古稀記念論集―』 二六七―二八六頁 雄山閣

嵩元政秀 一九七〇 『沖繩県内出土の錢貨について』 『南島考古』 一号 二〇―三三頁 沖繩考古学会

嵩元政秀 一九八三 『古錢―解説』 『出土錢貨の分類と特徴』 『沖繩歴史地図考古編』 六六・九八頁 柏書房

瀧沢武雄 一九九六 『日本の貨幣の歴史』 吉川弘文館

田辺市史編纂室 一九九四 『田辺市史』 四卷

永井久美男 一九九四 『埋蔵時期と最新錢』 『中世の出土錢』 二五三―二五九頁 兵庫埋蔵錢調査会

永野久美男 一九九五 『近年出土資料にみる中世末期出土錢の地域性と問題点』 『出土錢貨』 四号 三八―五二頁 出土錢貨研究会

永井久美男 一九九六a 『最新錢による一括埋納錢の時期区分』 『中世の出土錢貨―補遺―』 一一九―一二七頁 兵庫埋蔵錢調査会

永井久美男 一九九六b 『中世の出土錢貨の総括』 『中世の出土錢貨―補遺―』 一六三―一七二頁 兵庫埋蔵錢調査会

兵庫埋蔵錢調査会 一九九六 『日本出土錢総覧』 一九九六年版

本田道輝 一九八八 『鹿児島県下出土の錢貨集成』 『鹿大史学』 三五号 三一―四二頁

福島政文 一九九四 『草戸千軒出土の大錢』 『草戸千軒』 二二六号 七頁

宮澤知之 一九八八 『唐宋時代の短陌と貨幣經濟の特質』 『史林』 七一卷 二号 一一―三二頁

宮澤知之 一九九〇 『北宋の財政と貨幣經濟』 『中國專制國家と社会統合 中國史像の再構成』 二二 二八一―三三三頁

宮澤知之 一九九三a 『宋代陝西・河東の鑄錢問題』 『東洋史研究』 五一卷四号 一一―三三頁

宮澤知之 一九九三b 『唐宋代における銅錢の私鑄』 『中國近世の法制と社会』 一七三―二〇九頁 京都大学人文科学研究所

室塚秀明 一九九六 『鎌倉の模鑄錢』 『中世の出土錢』 二一八―二三三頁 兵庫埋蔵錢調査会

- 矢島恭介 一九五六 「貨幣—本邦における出土銭貨」『日本考古学講座』七卷 一七〇—一七三頁 雄山閣
山田邦和 一九九四 「京都における渡来系銭貨の生産と流通」『日本考古学協会一九九四年度大会研究発表要旨』 四三一—四六頁
日本考古学協会
吉村靖徳 一九九五 「權衡に関する一考察」『九州歴史資料館研究論集』二〇号 一一—二五頁
王錫聚 一九八八 『泉貨叢考』 中国書店

【付記】

脱稿後、愛媛県村山神社経塚及び京都市花背五号経塚から崇寧重寶の当十銭が出土していることを知った。(柴田圭子 一九九六「愛媛県の経塚出土銭貨」『出土銭貨』六号 六〇—六一頁、森島康雄 一九九六「京都府における銭貨を伴う経塚」『出土銭貨』六号 八〇—八三頁)

出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通(小畑)